

タイ王国での現地理解教育の実践

前シラチャ日本人学校 教諭

愛知県名古屋市立神宮寺小学校 教諭 深川 敦史

キーワード：現地理解・交流学習会・補習校巡回指導

1. はじめに

タイ王国、通称タイは、東南アジアの中心に位置し、高い経済成長率を維持しながら東南アジアにおける代表的な工業国としての立場を保ち続けている。そして、首都バンコクは東南アジア屈指の世界都市であり、世界各地から人が集まっている。

赤道に近いタイは年中暑いものの、日本の四季ほどではないが季節の違いがある。最も暑い暑季（3～5月）、毎日のように雨が降る雨季（6～10月）、雨が少なく比較的涼しい乾季（11月～2月）である。

微笑みの国と呼ばれる程、国民はおおらかで気さくであり、にこやかな笑顔であいさつをし、外国人が住みやすい国である。

2. 現地校との交流学習会

シラチャ日本人学校では、毎年、ブラパ大学附属小学校と交流学習会を行っている。この交流学習会が本校の現地理解教育の中心となっている。そのため何ヶ月も前から入念に計画をし、児童が主体的、意欲的に活動できる体制を作り、会を通してタイに対する好意や親しみを感じることができる交流学習会を目指している。

ブラパ校からは、タイの遊びや伝統的なタイダンスなどが紹介され、一緒に楽しむ。また、日本の文化として書道やうちわなどを紹介する。毎年、みんな熱心に取り組み、言葉が伝わらない時はジェスチャーで教え合う姿が見られる。様々な活動を通して交流を深めると共に、異文化理解も深めることができる会である。

【交流学習会の様子】

(1) 開会式

緊張したムードの中行われた開会式。両校の校長から「たくさんの友達をつくりましょう。そして、いつまでも友情が続き、両校の絆をさらに深めましょう。」とあいさつがあり、大きな拍手がわき上がった。その後代表児童のあいさつ。ブラパ校の児童が日本語でもあいさつをし、児童は驚きとうれしさの表情を見せていた。

(2) 文化交流

①タイの文化

まずは自己紹介である。事前にタイ語の授業で練習してきたタイ語での自己紹介をした。ペアの児童からプレゼントをもらい、うれしそうな表情が印象に残っている。次に、伝統的なタイダンスと楽器の演奏の仕方を教えてもらった。始めのうちは戸惑いの表情を見せていたが、目標の『受け身にならずに自分から』を達成するために、身振りや手振り、習ったタイ語を存分に使いながら交流をする姿に、たくましさや頼もしさを感じた。

②日本の文化

日本人学校の出し物は大縄跳びである。ブラパ校の児童は一度も経験がなく、手本を見せたときに驚きの表情を見せていた。ここでも日本人学校の児童は自ら積極的に活動し、ペアの児童と手をつなぎ跳び方などのコツを教えていた。縄に入るタイミングをタイ語で説明をする児童もいた。慣れてくるとブラパ校の児童の表情が柔らかくなり、大縄跳びを存分に楽しみ会場の雰囲気も明るくなった。回数が続くと喜び合いハイタッチをしたり、抱き合ったりする姿までも見られ、笑顔があふれる交流となった。

(3) 仲良し昼食

お弁当はみんなで一緒に食べた。交流活動後だったので、表情も柔らかく和やかな雰囲気の中での昼食となっ

た。また、もっと仲良くなろうと事前に用意した名刺交換をし、さらに明るくなり、笑い声でつままれていた。昼食後には閉会式をした。別れを惜しむように握手をしたり、会場まで一緒に手をつなぎ向かったりする姿に心が熱くなった。

(4) 閉会式

閉会式のメインはブラパ校と日本人学校の児童全員による合同合唱であった。曲は、タイでもよく知られている『世界に一つだけの花』。さらに、日本人学校のサプライズとして、手話をしながらの合唱を用意。合唱が始まり、ホールには全員の大きな声が響きわたった。手話が始めると、ブラパ校の児童は驚きの表情を見せていたが、見よう見まねで手話をするブラパ校の児童が見られ、心があたたかくなった。両校とも一生懸命歌って、心が通い合い、一つになった瞬間であった。

(5) 成果

交流学習会を終え、事後の感想では全員が楽しかったと答えた。また、交流を通してタイのことがもっと好きになり、もっと知りたいという気持ちが高まった。これは、準備段階から交流学習会を大成功させようと意欲的に活動を行ってきたことと、交流活動では自分から積極的に交流することができたからだろうと考える。

帰りのバスの中で、「タイの友達はとっても優しくかった。」との声が多く上がった。教え合ったり、一緒に楽しんだりする交流活動を通して、ブラパ校の児童の表情や態度などから直接的に感じた感想だと思う。言葉が通じなくても気持ちを何とかして伝えようとする熱意があれば、身振りや手振り、表情で理解をし合えることができることを改めて強く思った。

3. チェンマイ補習校への巡回指導

(1) チェンマイ補習校の実態

当地の在留邦人子女は、平日はインターナショナルスクールに通い、土曜日に本校に通ってくる。チェンマイ補習校は、チェンマイ日本人会が中心となって1997年に開校した。授業の内容や教科としては、国語と算数が中心であり、日本語指導に力を入れている。また、自然に日本語に慣れ親しむことができるように、読書や読み聞かせ、紙芝居などの活動も行っている。

児童の様子としては、「元気いっぱい」というのが第一印象である。また、国語や算数以外の教科に触れる機会である巡回指導を心待ちにしていたのが表情や態度から伝わってきた。ほとんどの児童は日本語での会話は問題なくすることができる。また、どの活動にも意欲的に取り組む。

(2) 成果

普段、英語やタイ語の中での学校生活を送っている児童にとって、日本語に触れる機会は、貴重な時間であることがよく伝わってきた。少ない機会や時間ではあったが、読み・書き・計算だけでなく、理科の実験や社会の地図記号、体育での体づくり運動などの普段できない学習を本当に楽しそうな表情で学んでいたことが大きな成果だろうと思う。

4. まとめ

タイのシラチャ日本人学校に赴任し、タイの自然や文化、歴史について多くのことを学ぶことができた。また、多くのタイの方との触れ合いを通して、タイの方の穏和で優しい性格を感じ取ることができた。また、日本を離れタイ国で生活している日本人の思いや考えも理解することができた。

今後はタイの良さをできるだけ多くの方に紹介していくと共に、微笑みの国のタイから学んだ「笑顔」で、世界中の人々に日本のすばらしさを自信をもって紹介できるようにしていきたい。